



『落窪物語』における道頼像(二〇一五年度卒業論文
要旨集)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学国語国文学会・札幌 公開日: 2016-11-22 キーワード: 作成者: 増田, 碧 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007519

『落窪物語』における道頼像

古典文学研究室 二四三三 増田 碧

本研究では、落窪の姫君に代わって報復・報恩を行った夫の道頼が、従来言われてきた「性格矛盾」や「復讐の鬼」ではなく、一貫して姫君を愛した人物であることを、彼の結婚観や心情、他の人物との関わり、虐め・報復・報恩の対応関係、他の継子譚との関係という観点から明らかにすることを目的とした。

道頼は、侍女のあこぎや乳兄弟の帯刀と協力し、姫君に「つらし」とは思わせないという考えで、生涯姫君を大切にしたり、彼の「うれし」さが明記された場面や「泣く」場面を見ると、対象は家族のみで、妻、子ども、両家の親と全員を思っている。

また、あこぎを姫君から奪う虐めに対し、中納言邸の女房を引き抜く報復、異母妹が夫と下向する際に女房を手配する報恩を行う。その他にも、大切な物の横取り、狭い所への幽閉、両親からの誤解、裁縫や結婚等に関わることで、姫君が継母北の方にされた虐めのつらさを理解させる報復を行い、その上でそれらを補う報恩を行った。彼の計画性は、報復前に「とげて後に、引きかへてかへり見む」という発言にも表れている。報恩時は姫君の主体性を強調して、実父はもちろん、継母も最終的に「継子なむうれしきものはありける」と姫君に感謝する。道頼の報復・報恩によって、姫君は継母とも親子の関係を築けた。道頼は一貫して姫君を愛し、自らの深謀遠慮や孝心で、継母を含め家族全員に愛されるという真の幸福を与えた人物である。